

私は、筑波での学生時代に Bayreuth 大学での 3 週間の語学研修と、Tübingen 大学で 1 年間の交換留学を経験しました。語学コース以外に留学生向けの週末遠足やタンデムパートナー制度が充実していた為、ドイツ生活を楽しみながらドイツ語を学ぶことが出来ました。

(註：筑波大学とテュービンゲン大学との交流はその後終了しました。)

今回、相澤先生から「今の仕事や生活に留学体験が活きていると思うこと」をレポートにまとめる課題を頂きました。当時は振り返りながら以下 3 つの点について個人的な体験談を報告させていただきます。

- (1) 「語学を学ぶ」について考えた
- (2) 前向きな諦めを学んだ
- (3) 自分で考えることの大事さに気づく

#### (1) 「語学を学ぶ」について考える

まずは、「語学を学ぶ」ということについてです。留学体験を通し、私は語学を学ぶことは目的ではなく手段なのだと実感しました。実体験として持ったその感覚が、今英語を学ぶ過程で役立っています。

大学生になって初めてドイツ語を始めた私にとって、ドイツ語はとても難解な言語でした。2 年生の新学期の時点で分離動詞を知らず、授業を中断させてしまったときの相澤先生の呆れ顔は忘れられません。今ではとてもいい思い出です。

そんな状態で夏休みの Bayreuth 語学研修に参加したのですから、苦勞しない筈がありません。初めての海外、英語もドイツ語も覚束ない私と、もう一人の学生を迎えてくれたのは、リタイア後悠々自適で暮らす素敵なお夫婦でした。バイエルン訛りのドイツ語を話す、英語を解さないドイツ人の二人との出会いは、辞書と格闘する 3 週間の始まりでした。

私たちに向かってゆっくりはっきりと発音してくれているのに、聞き取れない、聞き取れてもその単語を知らない。普通の会話が成り立ちません。焦って考え付いたのは「Was ist das? 作戦」。目についたものを指さし、名前を聞き、ひたすらにメモ帳に書くという作戦名そのままの行動です。優しい二人はそんな私たちを邪険にすることなく、辛抱強く私たちに付き合ってくれました。ホームステイの契約は滞在場所と朝・夕の食事提供でしたが、毎日昼食のサンドイッチを持たせ、食後に満腹になったかを聞き、週末には車で遠足に連れ出してくれるお夫婦でした。

語学研修に参加するまで、私にとって語学を学ぶことはテストのための勉強でした。文法や単語を覚え、辞書を引きながら日本語に訳すことに一生懸命でしたが、それは決してドイツ語を「使う」ための勉強ではありませんでした。Bayreuth 大学の語学研修授業及びホームステイ先での学びで、語学力は多少上昇しました。それは、優しい二人とただ会話をしたくて取った行動の結果でした。

3 週間の Bayreuth 滞在を経て、ドイツ語を勉強することは目的ではなく「人より良く知り合うための手段だ」という単純な、しかしとても大切なことを知ることが出来ました。このときのホストファミリーとは、今でも文通を続けています。

社会人になり、本格的に英語を勉強することに決めたとき、このときの体験から「自分は何のために英語を勉強するのか」「英語を上達させた後、何がしたいのか」、語学を上達させた後どう使うかを考えることが出来ました。「英語がペラペラに話せるようになりたい」「TOEIC の点数を▲点まで上げたい」といった目標よりも、「留学中に知り合った英語圏出身の友達と言葉の壁を感じず話せるようになりたい」という目標のほうが私にとっては重要だったので、投げ出さずに細々と語学の勉強を続けることが出来ています。

## (2) 前向きな諦めを学ぶ

Tübingen での留学生活で学んだのは、「前向きな諦め」でした。社会人となり、仕事をする中で、無意識で相手に対して期待しそれが果たされなかったときに、一人で勝手にがっかりする自分に気づいたとき、この「前向きな諦め」を思い出し、気持ちが楽になりました。

Tübingen 大学留学時は、多国籍な学生寮で一年間過ごしました。最初の衝撃は、少なくとも 2 週間は経過しているであろう洗いが山積みとなった、荒れた共同キッチンでした。「退去したフランス人がパーティをしてそのまま片づけなかった（自分には関係ないから片付けるつもりはない）」とクールに説明するインド人のフラットメイトの言葉に愕然としながらキッチンを片づけました。

授業にも慣れたころ、試験前にテスト勉強をしていると、キッチンから大音量で聞こえるダンスミュージックと笑い声。しばらく耐えた後、少し音量を下げたか交渉にいくと、「明日テストなの？ 私たちもよ！ ところで今みんな楽しんでいるからパーティに参加しなよ、紹介するよ！」とスペイン人のフラットメイトに誘われました。

不意に日本食が恋しくなっても、お米、日本の調味料はもれなく高い。歯医者も高い。少し外食しようとするとなんか高い。電車はよく遅れ、復旧の見通しは直前までわからない。冬は 15 時くらいから日が暮れる。

自分の努力ではどうともならないことが沢山あって、それに都度目くじらを立てていると気持ちが持たないことに気づきます。「察する」文化が通用するのは日本だからで、勝手に他人に期待しても文化も言葉も違うから分かってもらえない。相手に理解してほしいのであれば、その感情や考えを相手に対して理解してもらえる言葉で論理的に説明した上で、さらに共感して貰える内容でないと伝わらない。

自分の常識が通じない世界で、「前向きな諦め」の大切さを学びました。

まだ大人になり切れていない私は、今でも他人に勝手に期待して後でイライラしたりがっかりしたりします。そんなときは、ドイツ体験を思い出し、「まあ文化が違うから仕方ないか」と心を切り替えます。

### (3) 自分で考えることの大切さに気付く

最後は、「自分で考えることの大切さ」です。仕事を始め、基礎を覚える期間が終わると徐々に自分の意見を求められます。「〇〇さんが言っていました」や、「△の手順で習い、今までずっとこのやり方を続けていました」といった返答は、数年で使えなくなりますが、考えた末の選択は自分の判断の履歴として意思決定に役立ちます。

私が留学していた頃、大学の学費を徴収するかどうかを巡りドイツ国内で論争が起き、学生デモが各地で起きていました。当時の私は恥ずかしながら政治、経済にほとんど関心がなく、食事中に急に政治討論を始めるドイツ人を最初は不思議な目で見っていました。しかし、自分の目の前で起きているデモを見たときに、驚いたとともに周りで起きている事象を他人事として捉えている自分の姿に気づかされました。私は与件に対し、自分がどう思っているのか、賛成なのか、反対なのかも考えず、ただ受動的に生きていました。ゼミに参加すると、参加者全員が明確な意見を持っています。賛成、反対、どうしてそう思うのか、根拠は何か。ゼミ中のプレゼンテーションは、戦いの場でした。発表者も参加者もテキストを読み込み、自分の意見を持って臨んでいるからこそ討論が成り立っていました。

自分の意見を求められる機会は卒業後増えます。「欧米に比べ、日本では議論の授業がない」と聞いたことがあります。留学中にその違いを体験することが出来ました。勝ち負けを決めるための議論ではなく、その場で採れ得る最善の選択をするため各自が意見の意見を積み重ねて完成する議論は、私にとってとても感動するものでした。

そして、個人的な意見ですが、自分で考えて仕事をした方が楽しいです。

一年間余分に留学生として学生生活を過ごし、費用をかけていったことの意味が本当にあるのかと問われたら返答に窮します。今現在残念ながらドイツ語を使う仕事には就いていません。

しかし、留學生活に意味がなかったのかと問われれば、返答はNeinです。

私にとって、映像を見て、本を読んで、知識としてドイツのことを学ぶよりも、友人を作りホストファミリーや友人の家族に受け入れられてクリスマスパーティや誕生日パーティに招かれる体験の方が何十倍もドイツ語習得の動機づけになりました。

卒業後、今だに留學時代の友人、ホストファミリーと親交を保っているのは、留學中に語学だけでなく異なる文化を理解するための時間を持てたからだと思います。

資格、就職などの直接の影響はなくとも、留學経験はこれからも私の人生にプラスの影響を与え続けると思います。